

三一新書 409

島列日本小説

吉原公一郎 著



三一書房

吉原公一郎

よし はら こう いち ろう

1928年 福島県に生まれる

1951年 早稲田大学仏文科中退

現在 創作、評論に従事

著書 『松川事件の真犯人』（三一新書）

現住所 東京都世田谷区世田谷 4丁目 508

小説 日本列島

定価 280 円

1963年12月 7 日 第 1 版発行

著 者 © 吉 原 公 一 郎
1963年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 者 林株式会社 三 陽 社

製 本 所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台 2 の 9

電 話 東 京 (201)9 5 8 1 ~ 5 番

振 替 東 京 8 4 1 6 0 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 409

編集担当 井家上隆幸

小説 日本列島

吉原公一郎著

三一書房

カバ―装幀・栗津 潔

第一章

I

「コピーしましょうか」

「その必要はない」

サージャントはデスクに戻った。

《カラファン・E・リミット》

アメリカ陸軍座間輸送司令部内憲兵司令部所属。曹長。エメット・D・モローの変名を使用。

一九五八年三月一日死亡（三月十二日、芝浦岸壁において発見され、死後経過時間の推定によって逆算）。享年三十九歳。死亡の理由は、事故によるものと判定。

配偶者、ジェリー・リミット。一九五五年三月九日婦米し、現在、ペンシルヴァニアの実家に在住しあり。四十二歳

このサージャントときたら、いつもこうなのだ。若くて、記憶力が優れていて、猜疑心の深い男、それがF作業要員に求められる素質らしい。こういう手合いには、強圧的にでるにかぎる。

「文書に書いてある。これは命令です」

「オーケー、しばらくお待ちください」

サージャントは肩をすくめた。彼は、ロッカーから数枚のカードを持ってきて、秋山の前に置いた。

秋山文平は、朝霞のキャンプ・ドレイクに帰るつもりで、CID本部を出た。二時には朝霞につくだろう。

ジープが六郷川を渡ったとき、秋山はふと、芝浦岸壁をまわってみようと思った。それほどまわり道ではない。倉庫を縫って交叉している舗道に車を乗り入れると、泥と潮の匂いがした。ふいに、黒い海面を覆っている貨物船の群が、フロント硝子にとびこんできた。彼は車を捨てると、岸壁に沿って歩き出した。頭上の空気を裂いて、爆音が去った。港湾労働者が、あちこちにたむろし、不思議そうに彼を眺めていた。昼休みの一服なのだ。

あの日、リミット曹長が水死体となって、このF岸壁の下に浮んでいたのを、最初に発見したのも彼らだった。ちょうど、いまごろの時刻だった。あのときも、彼らは今日のように、陽だまりで一服やっていたのにちがいない。昨年の三月十二日のことだ。

「そろそろ、土左衛門シーズンになるわい」

懶うそうに、秋山の動きを見守っている労働者たちは、そんなことを語りあっていそうに思えた。春から夏にかけて、水上署では二日に一人の割合で、水死体を処理し

ている筈だった。秋山は身慄いした。ねっとりとした三角波が、白く泡だちながら、F岸壁を洗っていた。

通りまで引き返すと、彼は警視庁に電話をかけた。捜査三課、黒崎警部補。だが、黒崎は出かけていて留守だった。秋山は、三課長の宮川警視の顔を、ふと想い浮かべた。CIDと警視庁という特殊の関係から、彼とは顔見知りの間柄だった。頼めばよろこんで協力してくれるだろう。

リミット曹長の怪死事件では、日米合同で捜査本部を設けた。アメリカ側はCIDがあたり、日本側では警視庁の捜査三課が担当したものだった。CIDの資料が、故意にと思われる仕方で抹消されている現在、不完全ながら資料が残されているのは警視庁だけである。

直接警視庁に行って、宮川三課長に会ってもいいと思ったが、秋山は思いとどまった。キャンプ・ドレイクにおけるCIDの責任者、J・ポラック中尉に命ぜられたのは、本部の資料室で、リミットに関するカードの記載事項をメモしてくることだった。アメリカさんのために、任務以上に仕事をするのはばかげたことだ。それに、このさい警視庁に寄って、リミットについて、より詳しく

調査することは公用の域を逸脱することだ。宮川三課長からポラック中尉に伝わらないともかぎらないではないか。そういう点で、日本の公務員はアメリカの担当者に必要な以上の親密さをあらわそうとする。要するに忠実なのだ。指示なくして警視庁に寄ったことがポラックに知れば、私的な興味から行動したということになるだろう。仕事に熱心なあまり、というのは理由にならない。それは、疑惑をもたれる理由をつくるだけだ。

秋山は電話を切った。それから、思いかえして、もう一度、警視庁にかけ、交換を呼んだ。

「黒崎主任が戻りましたら、秋山文平という者から電話があったと伝えてくれませんか。二時頃から朝霞の方におりますから」

と、彼はいった。

電話をかけなおしたことで、気にかかったが、これでもいいのだ、と思った。

秋山は近くの中華料理店で軽い食事をすまし、まっすぐ朝霞のキャンプに戻った。二時前だった。

彼は、リミットに関するメモをタイプに打ち、ポラック中尉に、簡単に事情を報告した。それは、単純で陽気

な性格を、自分のオフィスに持ちこんでいた愛すべき青年将校を、一気に神経質にしたのである。

「またもCIAだ」彼は腹だたし気に舌打ちした。それから、無表情に突立っている秋山にはじめて気付いたというようにどなった。

「ゲラップ・ジャップ！」

2

四時過ぎに、黒崎から電話がきた。電話があったとき、ちょうど食事に出ていたので失礼した、と彼はいった。

黒崎とは仕事の関係での交際だ。二人の親密さは、中樞から疎外される下っ端役人同士としてのそれだった。

「お会いしたいですな、夕方は空いていますか」

「いつでもどうぞ。もっとも、仕事があるので、六時ごろまで本庁にいますかね」

秋山は、仕事の都合をみて、五時半ごろもう一度電話をすることにして、受話器をおいた。会話はなるべく簡

単な方がいいのだ。それが、ここでの処世術なのだ。彼は、どこかぎすぎすした黒崎の会話の調子を思い出した。日本人同士ではあたりまえのことなのだが、アメリカ人のなかに混って仕事をしていると、それが痛切に感じられるのだ。

仕事は五時に終る。それから、軍の専用バスに乗って池袋に降りる。池袋に着くのが五時半だった。

秋山はあらためて、池袋から警視庁に電話をかけた。

黒崎は待っていたものとみえて、すぐ電話にでた。

「ホワイト・ハウスでは、用件を三分の一で切りあげなければならぬでね」

と、秋山はいった。

日本人の駐留軍労務者たちは、司令部の建物を「ホワイト・ハウス」と呼ぶのである。それは、人種差別の象徴であったからだ。

「お察しますよ。亭主持ちならまだしも、白人の旦那様持ちはね。ところで、用件はなんですか」

「リミット事件、たしか、あなたが担当したんですね」

「去年の……、そうですよ。それが、どうかしました

か」

「捜査経過を教えてほしいんですよ、非公式にね。CIDもいっしょにやっているわけだけど、ぼくは担当しなかったものですから」

「ああいいですよ、資料を持って行きましょう。でも、おかしいですね、日本側よりもCIDの方が資料は揃っているんじゃないですか、あのときは、肝心な情報はさっぱり日本側にくれなかったんですよ」

「それは後で話します」

秋山は、有楽町の喫茶店で会うことにして、電話を切った。

三十分後、喫茶店には、既に黒崎がきていた。顔色が悪く、ハンサムで神経質、黒崎もまた、警部補の類型のなかに入っていた。これが、警部から警視になると腹がせりだしてくる。

「どうも、お待たせして」

「ぼくもいまきたところですよ」

ウェイトレスが、黒崎の前に紅茶をおいて去った。

「なかなか、いい店でしょう？ それに美人をそろえている」

黒崎は砂糖をかきまぜながら、声をひそめた。

「秋山さん、あなた、堀川弥生という名前を聞いたことがあるでしょう？」

「さあ」

たしかに、その名前はどこかで聞いたことがある。だが、はっきりは思いたせなかった。

「理由もなしに、世界をとびあるくことで有名な女ですよ、テレビにも二三度でたことがありますかな」

それで、ようやく思いたすことができた。ついせんだって、アフリカをまわってきた、という記事を、なにかの雑誌で読んだことがある。だが、それがどうしたというのだ。秋山は黒崎をみた。

「ここのマダムですよ」と、黒崎はいった。「カウンターのそばのブロンズに、上体をもたせかけて、客にサインをおくっている女がいるでしょう」

いま、二言三言話をかわしたのは、中国人のようだった。真珠が襟もとからこぼれ、彼女を中心に蟬集する客の注視を受けとめていた。彼女の衣裳は黒づくめであった。

「この店の水揚げが、旅行の費用に……」いいかけて、

秋山はやめた。なんと間拔けた感想だ。

「大きな声ではいえませんがね……」黒崎はさらに声を低めた。「あの女は、早船の情婦ですよ、早船茂一の」

「早船茂一？」

「そうですよ、内閣情報室長のね。驚いたでしょう？」

彼が資金をだして、あの女に店を經營させているんです。ここは、情報室の連中のアジトでもあるわけですよ。ここを洗ったら、きつとなにかでてくると思うんですがね。麻薬、密貿易、あるいはもっと大変なことがね。しかし、われわれには手をつけることもできませんよ」

「そんなもんですかね」

黒崎は腹をたてているのだろうか、彼ら下級官僚を支配しているある者たちに対して。いやちがう。彼はいくらか投げやりで、自分の身分をはかなんで、絶望的なだけだ。彼の言葉には、高級官僚に対する羨望がある。

「そうですよ。ここに手をついたら、それこそ、すぐにこれですよ」

黒崎は、手刀で自分の首を打つ真似をする。そして、かすかに笑った。

内閣情報室のスクヤンダルについては、たびたび噂に

聞いてはいたが、それは初耳だった。これだけの店をやるには、一千万円の資本では無理というものだろう。だが、あり得ることだと思った。

黒崎はそれだけいうと、「では、ごらんになりますか」といって、鞆から分厚い綴りこみを出した。カラファン・E・リミットに関する資料だった。

《カラファン・E・リミット曹長。》

昭和二十一年二月、占領軍兵士として来日、ただちに札幌憲兵隊司令部に配属さる。同年十二月に、仙台民間輸送司令部付憲兵隊に転任……》

「二十一年に札幌にいたんですか」

思わず秋山は呻いた。痛みが、古い傷痕を裂いて走った。

「いたらしいですね」

黒崎は、不審そうに眉をひそめた。彼がそうするのは、終戦の翌年に、リミットが札幌にいたことを、捜査の過程で問題にしていなかったことだ。

「なにか思いあたることがあるんですか、リミットが北

海道にいたことで」

「いいや、なんでもないんです。実をいうと、ぼくも、そのころ北海道にいたもんですから。中学で、英語の教師をしていたんですよ。あるいは、リミットにも会ったことがあるかも知れないと思ひましてね」

「そうですか」黒崎は感に堪えないという面持でいった。「そうでしょうね。いわゆる駐留軍労務者とちがって、あなたの場合は、自由に話せなければならぬんですからね」

「ブローケンもいいところです。でも、アメリカの兵隊が学校に来ると、英語の教師が、いちいち通訳にひっぱり出されたんですよ」

それは本当だった。軍政部の連中が、一週間に一度は学校にきて、授業ぶりをみて行くのだ。通訳にかりだされた日は、徹夜をした翌朝のような疲れかたをしたものだった。だが、秋山が激しい衝撃に見舞われることになったのは、そのせいではもちろんなかった。終戦の翌年に、札幌で起った不幸な事件について、リミットが、あるいは知っていたかも知れないということだった。一年早くこの事実を知っていたら、あるいはリミットから、

それについてなにか聞きだすことができたかも知れなかった。リミットは、同じCIDの要員ではないか。

秋山は異状な熱意をもって、捜査記録を追った。

リミットに関する捜査経過は、およそ次のようなものであった。

昭和三十三年三月十二日。発見者の港湾労働者の急報によって、水上署員が、芝浦海岸、通称岸壁下から引きあげた水死体は、日本人ではなかった。腐爛がひどく、外傷の有無は確かめられなかった。舌が前歯にからみ、脱糞の状態は、普通の水死人とかわるところなかった。しかし、外国人の場合は、水上署の管轄外である。事件は自他殺、事故死不明として、警視庁捜査三課に移った。

外事警察を担当するのは、主として、捜査三課と公安三課である。前者は殺人、強盗盗、詐欺など純然たる刑事事件を扱っている。公安三課が担当するのは、密出入国、スパイ活動などにかからむ警備情報、破防法、日米行政協定にもとづく刑事特別法違反の捜査だ。

連絡を受けた捜査三課では、鑑識課員を帯同して、ただちに屍体を検視した。腐爛の状態から、死後一ヵ月ぐ

らいと推定された。

男は灰色の背広を着ていた。ネームはなかった。自動車の鍵と、池袋・西銀座間の切符が、ポケットからでてきた。身許をたしかめる材料はなにもなかった。だが、服地から米軍の関係者らしいことが推察できた。

屍体は、身許、死因不明のまま、さらに米軍CIDに引渡されたのである。そして、神奈川県座間の米軍キャンプ内の病院において、ただちに解剖された。日本側で立ち合いを許されたのは、警視庁科学検査所の川北技官だけだった。

解剖の結果は、他殺の疑いを濃くした。肺には溺水が入っていなかった。入歯もゆるんではない。また、服装も乱れていなかった。それは、溺死の苦しみをしていないことを意味していた。

死後経過時間は、警視庁側の検視した推定を裏切り、十日乃至十四、五日と断定された。死体の人物は、なんらかの方法で殺害された後、海中に投ぜられた疑いがある、というのが、一致した見解であった。

捜査三課は、他殺の線を打ち出し、殺人事件としてCIDの協力を求め、課長室に『日米合同捜査本部』を設

けた。わが国犯罪史上はじめてのことである。

その日、宮川捜査三課長は記者会見をおこない、はじめて公式に事件の経緯を発表している。

他殺の疑いが濃いので、特別捜査本部を設け、CIDの協力を求めた。身許が割れれば捜査の方針もきまるのだが、いまのところ暗中摸索というところだ……」

CID当局は、男の所持品である自動車の鍵、地下鉄の切符のほか、米貨幣三枚、ハンカチーフ二枚、靴、バンドに至るまで綿密に調査した。彼が履いていた黒靴は米軍の支給品であった。バンドの裏側に、クリーニング店が使うゴム印の番号が発見された。兵籍番号の数字である。後頭部にある古傷も、CIDが「目星をつけていた男」の特徴と一致した。

それは、米陸軍座間輸送司令部内憲兵司令部所属のカラファン・E・リミット曹長であった。リミットは、三週間ほど前から行方不明になっていた。そして、二月十六日から、全国に指名手配されていたのである。

警視庁でも、〈殺されるおそれのある人物〉として、CIDの手配連絡を受け、神奈川県警を中心に、極秘裡に捜査を続けていたものだった。手続き上は、脱走兵の

扱いであった。

行方不明になったカラファン・E・リミット曹長が、なぜ、〈殺されるおそれ〉があったのか、という疑問について、警視庁の捜査資料は明確を欠いている。そこでは、この疑問に答えるものとして、CIDに所属するリミットの職務と、それをとりまく人物などから推測する域をでない。

カラファン・E・リミットは、朝鮮動乱のさい、一般兵科に戻って戦車兵として戦線に参加している。そして、一旦除隊して郷里のペンシルヴァニアに帰り、昭和三十年九月に、ふたたび陸軍に志願している。除隊後、兵籍にあったときを上廻る職を得ることができなかったためであつたろう。彼が志願に際して申告した特殊技能は、広東語を話せるということだった。だが、実際には片言程度だったらしい。彼は、一般兵科ではなく、なかばシビリアンのような、特別の仕事につきたかったようだ。以前に、CIDに所属していた経歴もある。

リミットは、昭和三十年の秋に日本に派遣され、キャンプ・ドレイクで情報部隊勤務の再教育を受けた。横浜市内の米軍憲兵司令部に配属されたのは、翌三十一年一

月であった。物資、特に秘密兵器の部品などが外部に流出するのを監視する任務だった。特に中国関係を担当した。このため、横浜の有力な華僑ボスにも紹介された。こうした複雑な国際的な交際関係から、あるいは消されるかも知れない、という懸念があったものと思われる。それが、警視庁の判断であった。

このほかにも、失踪の原因と考えられる二、三の事実がある。

リミットには、後頭部に傷痕がある。戦車兵時代に打ったものだ。このために、週期的に激しい頭痛におそわれ、おびただしい鼻血を出すことがあった。こうした時、彼は、一時的な錯乱状態におちいった。

まだある。リミットは賭博で身を滅ぼすタイプの一人なのだ。スロット・マシンにこり、失踪前の二月はじめ頃までに、千三、四百ドルの借金をつくっている。その上、ジェリー夫人のヘソクリ四百ドルにも手をつけて使いはたし、二人のあいだもおもしろくなかった。

ジェリー夫人から、神奈川県警本部に捜索願が出されたのは二月六日である。失踪当時のリミットの足取りは、判明しているかぎりでは次のようなものだった。

二月三日。夕方、横浜市神奈川区の宿舎を出て、神田のタイプライター商会に、古いタイプライターを売りに行ったが、時間が遅いので断われ、そのまま帰宅している。

二月四日。十時過ぎに、夫人と上京して有楽町で別れ、Fタイプライター商会に寄った。エメット・モローの変名で、タイプライターの代金七千円を受け取る。その足で、リミットはキャンプ・ドレイクに廻り、同僚とバクチを打っている。そして、同夜八時すぎ、夫人を待たせてあった日活ホテルで、晚餐をとみにしているのである。食事がはじまると、リミットはいきなり立ちあがった。「用事を思い出したから、出かける」

リミットは、驚く夫人の前に兵籍証明書、生命保証書の二通をおいた。

「あとで、これを上官に渡してくれないか」

早口でそっくり、リミットはドアの外に姿を消したのだった。ジェリー夫人は急いで後を追ったが、すでに夫の姿は見当らなかった。

このときを境に、カラファン・E・リミットは消息を絶った。ジェリー夫人が、夫の安否を気づかって八方手

をつくした末に、羽田を発ってペンシルヴァニアに向ったのは、リミットが死体となって、F岸壁に発見される三日前だった。三月九日である。

米軍当局は、夫人がリミットの交際関係などを一番よく知り、死因の鍵も握っているかも知れないと判断した。で、ジェリー夫人の再調査をFBIに依頼した。だが、結果はなにも得られなかった。

日本側の捜査本部でも、有力と思われる聞き込みはあった。一組の刑事によってもたらされたものだ。失踪した翌日の二月五日午後二時ごろ、新橋の質屋K商事で、本人の時計を抵当に、二千元借りた者がいるという新事実だ。取引きの際のサインも発見された。

筆蹟を鑑定したのはCIDである。その結果、リミットのものとは断定できない、ということだった。サインがリミットのものでないとすれば、犯人もしくは第三者が、本人の時計をもってK商事に現われたことになる。捜査本部は、リミットの時計を持っていた謎の男に、追及の手をのばした。だが、その影すらもつかむことができず、捜査は空しく終った。

捜査はふり出しに戻った。特捜本部長は、リミットの

死因を徹底的に調べるよう指示した。

ふたたび米軍側との交渉がはじまった。やっと借りうることできたリミットの内臓は、ただちに東大、長崎大法学教室にまわされ、精密検査がおこなわれた。しかし、死因を決定づけるような結果は、なにひとつ得られなかった。

そして三月二十七日、米軍当局は突如として、次のような談話を発表した。

「カラファン・E・リミット曹長の死は、自然死ではなかった。それは、水死でないことを示している。死因となるような負傷も認められなかった。精密検査の結果では、なんの薬物も検出できなかった。——死因は永久にわからないかも知れない」

「おかしいでしょう？」

資料の上を走る秋山の視線を追っていた黒崎警部補が、突然いった。彼の口調には、納得を強いるところがある。

「そう思いませんか」

「ええ、おかしいですな」

「死因が、なぜ永久にわからないのか、本来、そんなこ

とはあり得ないのです。いや、厳密にいえばあるかも知れません。しかし、アメリカ軍の発表として、それはあり得ないはずなのです」

「ほう、それはまたどうして？」

「米軍がこの発表をしたとき、われわれ末端の刑事たちは憤慨したものです。最初の解剖がおこなわれたときも、日本側ではすぐに解剖所見を知らせてほしいと連絡をとっています。しかし、米軍はなんと返事をしたと思いますか。〈死体は本国のカリフォルニア州オークランドの基地に送ってしまったから、わからない〉というのです。これは、日米行政協定の違反行為でもあるわけですよ。死体の確保と管理の権限は、日本側警察にあるのですから。日本側当局の了解なしに、死体を運び出すことはできないはずですよ」

黒崎はこの問題を話すだけで腹がたつらしい。第一線刑事の正義感であろう。だが、秋山は、黒崎の言葉の裏に米軍の秘密を嗅いだ。彼は黒崎の話をうながした。

「警視庁では、なぜ最初に死体を引渡したんですか」

「CIDに連絡はしましたが、引渡したものではありませんよ。あれよあれよというまに、座間のキャンプに運び

去られた、という感じですね。駄目です、日本の当局は。ぼくもその一人ですが、抗議一つしないんですからね。リミットの時計を持っていた男を追うことに失敗した後で、捜査がふり出しに戻ったんですが、そのときに精密検査をする内臓を借りるのさえも、さんさん接渉した上で借りられたのです。疑ってかかれば、それさえも本人のものかどうか知りません。われわれが知りたかったのは、内臓の毒物検査の結果だったのです。とにかく米軍側は、肝心のことはなにひとつとして協力してくれなかった。それが実情でした。リミットが失踪したときも、〈殺されるおそれのある人物〉といいながら、なぜ殺されるおそれがあるのか、その理由は決して知らそうとはしません。虫のいい話ですよ。われわれは、漠然とその任務から推測するだけですよ」

「そうだったんですか。ぼくは、日米合同捜査本部という以上、両国の担当者が一体とまで行かなくとも、ベストをつくしたと思っていましたよ」

「下請け捜査、それも適当に推理して、きりきり舞いたという感じでした」

「見通しはどうなんです？」

「お宮入りですな。ぼくもそうだが、捜査にあたった者の意見では、リミットは中共の対日工作員に近づいて、その組織を内偵したために消されたのだ、と思っすよ。そうとしか考えられません」

黒崎警部補は言葉を切ると、しばらく黙った。

「この事件について、C I Dではどうなんです。秋山さんの電話があったときに、実をいうと、期待したのはわたしの方なんですよ。なにか聞けると思って」

「そう思われるのは当然です。しかし、C I Dには、リミットに関する資料はないのですよ。それで、警視庁にならあるだろうと思っただけです」

「ない、って。まさか」

黒崎は笑い飛ばした。周囲の客がびっくりして、二人をみた。

「本当です。嘘をいっても仕方がありません、ぼくも日本人ですからね」秋山はかすかに笑った。

「実は、われわれのボスであるポラック中尉の命令で、リミット事件の資料を調べに、座間のC I D本部に行ったのです。そのファイル・サーヴィス・セクションには、リミットの不完全極まる経歴が残っているだけで、

抹消されていました。死因も事故死になってましたよ」

「とても信じられませんな」

「そうでしょう。で、それをありのままポラックに報告したんですが……」

ポラックは、またもC I Aか、と呟いたものだ、というふうとして秋山は口をつぐんだ。これは、まだいべきではないのだ。今日の会話を、黒崎は同僚に語るだろう。宮川捜査三課長にも話すかも知れない。

「リミットは、それだけ秘密の任務をもっていたということですね。ポラックはなぜ、リミットの事件に興味をもったのかな。彼が日本にきたのはいつですか、まだ若いんでしょう？」

「ハーバードを卒業したての男です。日本には半歳足らずですよ。彼がリミットに興味をもった理由は知りませんがね」

秋山は、「河岸をかえませんか」という黒崎の提案で、まもなくそこを出た。

第二章

I

アパートのフロアには、人影も見当らなかった。腕時計は午前一時を過ぎていた。

エレベーターは八階で停っていた。ボタンを押すと、昇降指示器がすぐ動き出した。七階、六階、……四階を指示したとき、秋山修平は肩をすくめ、階段の方に歩きだした。階段は螺旋をえがいてのぼっていた。——八階をのぼりきったとき、彼は息切れさえもしなかった。

目的の部屋は八〇一号だった。堀川弥生は一時には部屋に帰っているはずだった。階段の左手、突きあたりの部屋だ。

部屋のなかで、かすかに水音がしていた。修平はプザ——を押した。水音がやみ、小窓から眼がのぞいた。扉が

内側にあけられた。蒼い空気が、百合の匂いをふくんで廊下に流れてきた。

堀川弥生は、無雑作にタオルをまきつけただけの恰好で立っていた。修平が入ると、彼女はなににもいわず、後手で扉を閉めた。鍵を降ろす金属音がした。

「シャワーを浴びに行っているよ」

「もういいわ。あなたは？　そう、あなたは嫌いだったわね」

「理由なんかないんだ」

弥生は、ブランディと氷のかけらをほこんできた。

「着替えてくるわ」

弥生は隣室に姿を消した。入口から、寝台の端がのぞいた。鏡のなかで、タオルがすべり落ちた。

「上衣をとりなさい」

弥生は、ロープをはおりながら、鏡のなかをのぞいた。修平は答えないで、ブランディをなめていた。弥生は、髪にブラシをかけはじめた。

「香港には、どうしてこなかったの？」

「気が向かなかったんだ」

「なにかあったの？」